

## 気象集誌の最近の取り組みと今後

気象集誌編集委員長 佐藤正樹

会員の皆様には、気象集誌 (Journal of the Meteorological Society of Japan : JMSJ) に支援をいただき感謝いたします。気象集誌は歴史の長さを誇り、国際的なジャーナルとして高い評価を受けています。気象集誌は1882年に創刊し、第一輯が1922年まで、引き続き第二輯が1923年に創刊し、2016年に第94巻が刊行されています。近年のジャーナルを巡る状況の変化、それに伴う著者や読者からの要望に対応し、気象集誌は伝統の中に今日性を求めて様々な観点で改善を進めています。特に、編集委員会制、査読・製作プロセス、特集号・特別号、国際情報発信に関して、気象集誌の最近の動向についてご報告します。

### 対象・スコープ

気象集誌は、国内の唯一の気象専門の国際学術雑誌として、気象学の様々なテーマを扱っており、観測、モデリング、データ同化、解析、全球・領域気候研究、人工衛星リモートセンシング、化学・輸送過程、力学、地球流体力学等の様々な分野における科学的な新たな知見・技術開発に関する研究論文が気象集誌のスコープです。特に、アジアモンスーン、気候モデル・メソモデル、数値天気予報に関する研究の論文が比較的多いのが特徴となっています。

気象集誌では、研究論文 (article)、招待レビュー論文 (invited review article)、ノート (notes and correspondence) の3種類の論文を出版しています。ノートに関しては、投稿から4ヶ月以内に採否の判断を行うようにしています。ノートは、採否の決定が迅速になされるとともに、投稿原稿のページ数制限が20ページまでとSOLA等のレター誌よりもフレキシビリティがあります。このようなノートの利点をぜひ活用していただき、速報性を希望する原稿については、ノートへの投稿をぜひご検討下さい。

### 編集方針

気象集誌は編集委員長・副委員長・24名の編集委員からなる編集委員会によって運営されています。論文の採否は編集委員会の合議によって決められています。論文採択には、様々な観点のうち、科学的新規

性・技術的開発が最も重要ですが、気象集誌の査読方針として、論文の良い点を汲み上げようという建設的な査読プロセスを心がけています。例えば、論文として価値がある箇所があれば、その箇所がアピーリングとなるように著者へ構成を含めて改訂を提案したり、若手の研究者や学生の投稿論文に対しては、教育的な配慮から、よい論文に仕上げるためのアドバイスを行うことがあります。編集委員会システムは、論文の質の向上、編集委員間での編集方針の共通認識化に役立っていると考えています。

### 査読・印刷プロセス

気象集誌では論文の査読・受理後の製作プロセスの迅速化に努めています。査読については、レビューワーに通常1ヶ月を期限にレビューを依頼し、著者には通常3ヶ月以内に改訂していただくよう要請しています。受理された論文には即座にDigital Object Identifier (DOI) を発行し、Early Online Release (EOR) として公開します。また、ほぼ同時に、論文の代表的な図・要点を1ページ分にまとめたGraphical Abstractを著者に要請し、受領次第JMSJのウェブサイト (<http://jmsj.metsoc.jp>) に掲示します。引き続き、組み版・校正を経て、受理からおおむね4ヶ月後に冊子体として発行されます。電子版はJSTAGEのサイト (<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/jmsj>) において、フリーで公開しています。今までは電子版の公開は冊子体の発行後としていましたが、2016年からは、冊子体の発行を待たずに、電子版の準備が出来次第公開するように変更しました。今後も、査読プロセス、製作プロセスの改善を図り、より迅速な公開を目指していきます。

### 投稿料

投稿料に関して、可能な限り低価格な料金設定を行っています。通常のページは4,000円から、カラーページは実費よりも安い価格の1頁あたり21,000円としています。2016年より、気象集誌に掲載された論文の第一著者が1年以内に気象集誌に第一著者として投稿された場合、掲載時に投稿料の5万円の減免を行う

こととしました。例えば、2015年12月号に掲載された論文の第一著者が、2016年12月末までに第一著者として論文を投稿した場合に減免の対象になります。減免対象の方は、投稿時にカバーレターに記載をお願いします。

### 特別号・特集号

気象集誌では、特定のトピックに関して特別な編集委員会を組織して、特別号・特集号を企画することができます。特別号は通常号とは別の独立した巻号として発行するのに対し、特集号は通常号に合冊として発行することが両者の違いです。以前とは異なり、特別号・特集号は、特別な費用負担なく企画することが可能となっています。特別号・特集号編集委員会は査読プロセスにのみ責任をもち、受理決定後の著者とのやりとり、技術校正、製作プロセスについては、通常号と同様に編集事務局で作業を進めます。ページチャージは通常号と同様になります。以前、気象集誌の特別号を企画された方は、経費負担や技術校正・製本等の煩雑な事務作業等を記憶されているかもしれませんが、最近はより大幅に負担が軽減されていますので、ぜひ再度ご提案下さい。特別号・特集号の企画に関心がある方は、編集事務局までご連絡をお願いします。

2015年には、特別号として“Special Issue on the Coordinated International Field Campaign on the Madden-Julian Oscillation”を12月に発行し（第93 A号）、9編の論文が掲載されました。また、特集号としては、“Special Edition on Contributions to Asia Oceania Atmospheric Sciences”の発行を進めています。この特集号は、2014年 Asia Oceania Geosciences Society 年会（AOGS2014）で発表された論文を対象に企画したもので、一論文当たり5万円のページチャージの減免を行いました。また、初めての試みとして、特定の通常号と合冊とはせずに、複数の巻号に掲載するバーチャルな特集号としました。これによって、特集号の全論文が揃うのを待たずに、特集号に掲載された論文が早く出版されることとなります。

### 招待レビュー論文

気象集誌では、招待レビュー論文のセクションを設けて、特定の研究テーマに関して、第一線で活躍されている研究者に執筆を依頼しています。2015年には、二つの招待レビュー論文が掲載されました。Yoshimura (2015) は、気候学・気象学・水文学に

おける水の安定同位体の応用に関してレビューされました。Kato *et al.* (2015) は気候研究における CERES (Clouds and the Earth's Radiant Energy System) データについて議論されました。

### 気象集誌論文賞

気象集誌編集委員会では、前1年間に気象集誌に掲載された論文の中から、毎年数編優秀な論文を選定し、気象集誌論文賞を授与して顕彰することとしています。2015年の気象集誌論文賞は、次の2論文に授与されました：Kobayashi *et al.* (2015) は気象庁55年長期再解析 (JRA55) の開発研究について、Satoh *et al.* (2015) は熱帯低気圧の全球の発生数の制約条件についての研究です。特に、Kobayashi *et al.* (2015) は JSTAGE で2015年のアクセス数が最大の論文であり、重要な研究であることを示しています。

### 論文の可視性・アクセス

論文の著者にとっては、自分の論文がいかにか他の研究者の目に留まるかが気になることだと思います。気象集誌の論文は十分に可視性があり、容易にアクセス可能です。気象集誌の論文は、1882年から現在まで、全て JSTAGE のウェブサイトにて無料で公開されており、誰でも、どこからでも、インターネットを介して無料でアクセスできます。

気象集誌では、掲載論文の可視性を少しでも高めるべく、平成25年度からの日本学術振興会の科学研究費研究成果公開促進費の交付をうけて、国際発信の強化に努めています。ウェブページ <http://jmsj.metsoc.jp> には気象集誌に関する様々な情報を集約し、また Facebook (<https://www.facebook.com/jmsj.metsoc/>) や Twitter (@JMSJ\_metsoc) のソーシャルネットワークサービス (SNS) やニュースフィード RSS を通じて、新着論文情報を配信しています。EOR や Graphical Abstract, JSTAGE での公開の情報はこれらのメディアを通じて発信しています。ウェブには最新論文情報の他、今までの特別号・特集号、レビュー論文、気象集誌論文賞、アクセス統計、編集委員の担当論文等の情報についてまとめています。また、気象集誌の掲載論文に引用されている論文の著者宛に引用情報のメールを送るサービスを開始しました (cited alert service)。2005年以降の引用文献を対象としています。

### インパクトファクター

インパクトファクター (IF) は、学術雑誌の論文の引用度の尺度です。IF の有用性やその値に関しては常に議論の対象となりますが、IF は依然として学術雑誌の指標として最も知名度があります。気象集誌の2014年の IF は1.250です。しかし、IF は非常に変動が激しく、ある特定の引用数が大きな論文が対象となるかどうかで IF の値は大きく変わります。編集委員会としては、単に IF の向上を目標とするのではなく、質の高い論文をより多く掲載するとともに、掲載論文の注目度を高めることによって、ジャーナルの価値を高めたいと考えています。今後も、気象研究の論文の信頼できるプラットフォームとしての機能をより重視し、論文の質の向上を通じた、結果としての IF の向上を目指したいと考えます。

### 気象集誌の今後

学術雑誌は、電子ジャーナル化、購読料の高騰、オープンアクセス化、様々な商用ジャーナルの創刊等、大変革の時代になっています。気象集誌は、時代の要請に合わせて変革が必要であると考えますが、歴史や伝統の重みを重視し、一時的な流行に左右されないことも必要です。気象学会の会員の皆様は引き続き

気象集誌が国際的な気象研究コミュニティで重要な存在であり続けるべくご議論いただければと思います。

会員の皆様、編集委員、著者、査読者、読者、購読者には、気象集誌への支援を感謝いたします。気象集誌に関するフィードバックを歓迎するとともに、引き続き、気象集誌へのよい論文の投稿をよろしくお願いいたします。

### 参考文献

- Kato, S., N. Loeb, D. Rutan and F. Rose, 2015: Clouds and the Earth's Radiant Energy System (CERES) data products for climate research. *J. Meteor. Soc. Japan*, **93**, 597-612.
- Kobayashi, S., Y. Ota, Y. Harada, A. Ebata, M. Moriya, H. Onoda, K. Onogi, H. Kamahori, C. Kobayashi, H. Endo, K. Miyaoka and K. Takahashi, 2015: The JRA-55 Reanalysis: General specifications and basic characteristics. *J. Meteor. Soc. Japan*, **93**, 5-48.
- Satoh, M., Y. Yamada, M. Sugi, C. Kodama and A. T. Noda, 2015: Constraint on future change in global frequency of tropical cyclones due to global warming. *J. Meteor. Soc. Japan*, **93**, 489-500.
- Yoshimura, K., 2015: Stable water isotopes in climatology, meteorology, and hydrology: A review. *J. Meteor. Soc. Japan*, **93**, 513-533.